

二〇一四年度ソワニエ看護専門学校一般入試（二次）試験問題

（ 解答は、全て解答用紙へ記入しなさい。特に指示のない限り、答えの末尾に「」は不要。同じ選択肢を二度使う設問はない。 ）

I 次の語の対義語を漢字で書きなさい。

- ① 危険 ② 一般 ③ 過失 ④ 簡単 ⑤ 脱退

II 次の空欄のカタカナを漢字に直して、四字熟語を完成させなさい。

イ百（セン） 錬磨 口外交（ジ） 令 八一心不（ラン） 二無（イ） 無冠 ホ白（シ） 委任

III 次の文を読んで、後の問に答えなさい。

わたくしは歌のことはよくわからず、広く読んでいるわけでもないが、岡麓<sup>おかふもと</sup>先生のお作には「あ」敬服している。誠に滋味の豊かな歌で、くり返して味わうほど味が出てくるように思う。中でも最も敬服する点は、先生が、目立って巧みな言い回しとか、人を驚かせるような奇抜な表現とか、刺激の強い言葉とかを、「い」使われないことである。どんなに烈<sup>はげ</sup>しい内容を取り扱われる場合でも、「う」淡々として、透明な感じを与える。わたくしはこの透明さが表現の極致ではないかと考えている。「え」無色透明で歪<sup>ひず</sup>みのない窓ガラスが外の景色を最も鮮やかに見せてくれるように、表現の透明さは作者の現わそうとするものを最も鮮明に見せてくれる。また透明であればあるほどそこにガラスのあることが気づかれないうと同様に、透明な表現もその表現の苦心とか巧みさとかを意識させず、ただ端的に表現されたものに直面せしめる。それに反して警抜な表現とか巧みさを感じさせる言い回しとかは、ちょうど色のついたガラスのように、見えるものに色をつけてしまう。その色の好きな人は、あるいは好きな間は、その色が見えるというだけで喜びを感じるであろうが、その色のきらいな人、あるいは飽きてきた人は、その色<sup>A</sup>が<sup>A</sup>ありのままの物の姿を見るのにひどく邪魔になることを痛感させられる。それを感じはじめると、どの色といわず、色のついていること自体がいやになってくる。そういう意味で、わたくしには、あの淡々とした透明な感じが実にありがたい。

「お」これは先生の歌が無技巧だなどということではない。あれほど一字一句の使い方、置き方に気を配った歌、あれほど浮いたところのない、中味のびつしりとつまった歌、またあれほど濃<sup>こま</sup>かいニュアンスを出した歌が、技巧に熟達せず<sup>こま</sup>に作れるものではない。しかし先生の歌は、その巧みさを少しも感じさせないほど巧みな域に達していると思う。今度の歌集で先生は、

ものさびものの滋味はおのづからいたりつく時はじめて知らぬ

と歌ってられるが、そういう先生の境地が先生の歌を味わうものの心にもしみじみと伝わってくるように感ぜられる。それはまことに達人の域である。何事にもあせりが目立ち、どぎつい表現があふれている今の世の中で、こういう達人の歌に接し得ることは、不幸に充ちたわれわれの生活の中で、  
《か》《ありがたい幸福だと言つてよい》。

歌集『涌井』は動乱のさなかに作られた歌の集である。戦争の最後の年、空襲が《き》《激甚<sup>げきじん</sup>となつてくるころに、先生は、病を押して災禍を信州に避けられた。その後東京の町は激しく破壊され、先生が大震災後住みついていられたお宅も、愛蔵された書籍<sup>②</sup>や書画や骨董<sup>③</sup>とともに焼けてしまった。そののみか、戦いの終わろうとする間ぎわになつて、やはり空襲のために、学徒で召集されていた愛孫を失われた。そのあとには占領下の変転のはなはだしい時期がつづく。その一年あまりの間、トカイ育ちの先生が、立ち居も不自由なほどの神経痛になやみながら、生まれて初めての山村の生活の日々を、「ちようど目がさめると起きるような気持ちで」送られた。その記録がここにある。それはいわば最近二十年の間の日本の動乱期がその絶頂に達した時期の記録なのであるが、しかしその静かな、淡々とした歌境は、少しも乱れていない。これこそ達人の境であるという印象は、この歌集において一層深まるのを覚えた。(歌集『涌井』を読む 和辻哲郎)

問1 傍線部①く④のカタカナは漢字に、漢字は平仮名にそれぞれ直しなさい。

問2 《》部「あくき」に入れるにふさわしい語を次より選んで、符号で答えなさい。

イ いかにも    ロ ようやく    ハ 決して    ニ ちようど    ホ かねがね    ヘ しかし    ト まことに

問3 次の中から和辻哲郎の作品を二つ選び、符号で答えなさい。

a 我が輩は猫である    b 故事巡礼    c 走れメロス    d 蜘蛛の糸    e 面とペルソナ

問4 作者は、「岡麓先生」の作品について、窓ガラスに例えてその特徴を述べているが、要するに作品から受けるどういう点に筆者は魅力を感じていることになるのか、文中の語句を十字か十一字で抜き出して答えなさい。

問5 二重傍線部「A」の「ありのままの物の姿」とは、「外の景色」のことではない。それではこれは、何のことを言おうとしているのか、文中から十二字で抜き出して答えなさい。

問6 二重傍線部「B」の「これ」は、歌集『涌井』が持つどういふ点を指し示していることになるか、可能な限り文中の語句を使って四五字以内でまとめなさい。

IV 次の文を読んで、後の問に答えなさい。

下人は、それらの死骸の腐爛した臭気に思わず、ハナを掩った。しかし、その手は、次の瞬間には、もうハナを掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまつたからだ。

下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に、嗅つている人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、瘦せた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持って、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱をとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従つて抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従つて、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行つた。そして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。——いや、この老婆に対すると云つては、語弊があるかも知れない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、餓死をするか盗人になるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何のミレンもなく、餓死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のように、勢いよく燃え上り出していたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従つて、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとつては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であつた。勿論、下人は、さつきまで自分が、盗人になる気でいた事などは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上つた。そして、聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのは云うまでもない。(羅生門 芥川龍之介)

問1 傍線部①⑤のカタカナは漢字に、漢字は平仮名にそれぞれ直しなさい。

問2 波線部の「頭身の毛も太る」とほぼ同意の慣用句を、波線部中の漢字二字を含む七字(つまり、「ひらかな」は五字)で書きなさい。

問3 二重傍線部「A」の「ある強い感情」について、二系統のものとして分かり易くまとめる表現を十二字で抜き出し、さらに下人を見た「どんな情景」がそうした感情のそれぞれにつながつていつたかについて分かり易く説明しなさい。

問4 二重傍線部「B」の「恐怖が少しずつ消えて行つた」理由を述べたものとして、最も適切なものを次から選んで符号で答えなさい。

イ腐乱した死骸の臭気や死体そのものの存在、また老婆の異様な風体にも次第に慣れてきたから

ロ老婆が松の木片に火をともして死骸の中にうづくまり、一つの死骸の顔を眺めていた目的が次第に分かってきたから  
ハ最初は正体が分からず恐怖感を覚えていたが、死骸の中にうづくまっていた人間が弱そうなお婆だったから

ニ老婆が許すべからざる悪を行っていることを目の当たりにして、恐怖より憎悪の方が勝ってきたから

問5 「二重傍線部」「C」の「合理的」に関連して、「合理的でない考え」が書かれた一文がある。その文がどれか、頭の五文字を抜き出して答えなさい。

V 次の文を読み、後の問に答えなさい。

にくきもの 急ぐ事あるをりに、長言する客人。あなづらはしき人ならば、「後に」などいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかし人、いとにくし。

硯に髪の入りにてすられたる。また墨の中に石こもりて、きしきしときしみたる。俄にわづらふ人のあるに、驗者もとむるに、例ある所にはあらで、外にある、尋ねありくほどに、待遠にひさしきを、辛うじて待ちつけて、悦びながら加持せさするに、このごろ物怪に困じにけるにや、ゐるままに即ねぶり聲になりたる、いとにくし。(枕草子)

問1 本文は枕草子の一節である。作者名を漢字で書きなさい。

問2 前後の文をよく読んだ上で、傍線部①～⑤を現代語訳しなさい。

VI 次の文を読み、後の問に答えなさい。

君子曰、學不可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>已。青取<sub>ニ</sub>之<sub>一</sub>於<sub>レ</sub>藍、而青<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>藍、冰水為<sub>レ</sub>之、而寒<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>水。

問1 傍線部の「不」と「已」についてはふりがなが振られていない。どう読むべきかを考えて、傍線部を全文ひらかなで書き下しなさい。

問2 本文中には置き字として扱われている文字が二種類ある。両方とも書き出しなさい。ただし、両方が合って正解とする。

問3 前方の文の訓み方を参考にしながら、二重傍線部を書き下し文(漢字仮名交じり)に直しなさい。

問4 本文を出典とする故事成語を書きなさい(平かなも可)。